

はじめに 私だけの風景

私は、「人生は面白い。生きるとは、サーカスの綱渡りのようだ」と思っている。詩人、中原中也の詩に、『サーカス』がある。私が「いいね」と言うと、夫が「石川啄木、中原中也、北原白秋が好きだなんて、少女のようだ」と笑う。

中学生、高校生の頃、作家の五木寛之がデビューし、次々と小説を発表した。『蒼ざめた馬を見よ』『海を見ていたジョニー』『さらばモスクワ愚連隊』『青年は荒野をめざす』『幻の女』『裸の町』『恋歌』『ソフィアの秋』『デラシネの旗』。そしてエッセイ『風に吹かれて』。すべてを読んだ。ファンだった。書店には「青春いかに生きべきか」をテーマにした本がたくさん並んでいた。学生運動の真ただ中で、若者は競って本を読んだものだ。今でも書店には草柳大蔵の本があったりして懐かしい。

私の童謡の会に「看護婦だった。注射が大好き」と言う人がいた。「苦労されたでしょう。経験を書いておかれるといいですよ」と助言したことがある。それがきっかけで、自分でも経験を書いておく事にした。星新一の短編小説には及ばないが、短編エッセイとしてまとめたつもりです。時代はめまぐるしく変化し、落ち着いて本を読む人が少なくなった一方で、パソコンや携帯電話の普及で、だれでも簡単に文章を書くようになった。パソコンは、ひらがなを漢字に変換してくれるのが最大の利点です。これを利用しないのは「もったいない」。時代から取り残されてしまう。

しかし、書こうとしても、私は小さい頃の事を、ほとんど覚えていない。いつもぼんやりしていたので。それでも、ふと思い出す風景がいくつかある。家のソバ畑の白い花の中に腰を降ろして見ていた青い空。門から家までの間の両側に咲いた芝桜の目

に鮮やかなピンクのジュウタンの風景。茶摘や麦踏みは家族や従姉妹一家と共同で行った。大きなザルに入ったり、柿の木にのぼったりして遊んだのを覚えている。思い出すのは、父も母も、母の妹も、従姉妹たちも、みんな元気で笑って暮らしていた頃の事です。「楽しかったな」と思います。

この本は過去に出版した『満点ママ』（夢工房）の後編です。娘たち二人も結婚し、新しい家庭が二つできました。そのことが一番うれしい出来事です。

平成十七年（2005年）と、平成二十三年（2011年）に書いた文章をまとめたものです。「おだわらシルバー大学」の授業や「童謡の会」の例会で話した事も収録しました。記憶が薄れて行くので、書きとめておくことにしました。

池田小百合